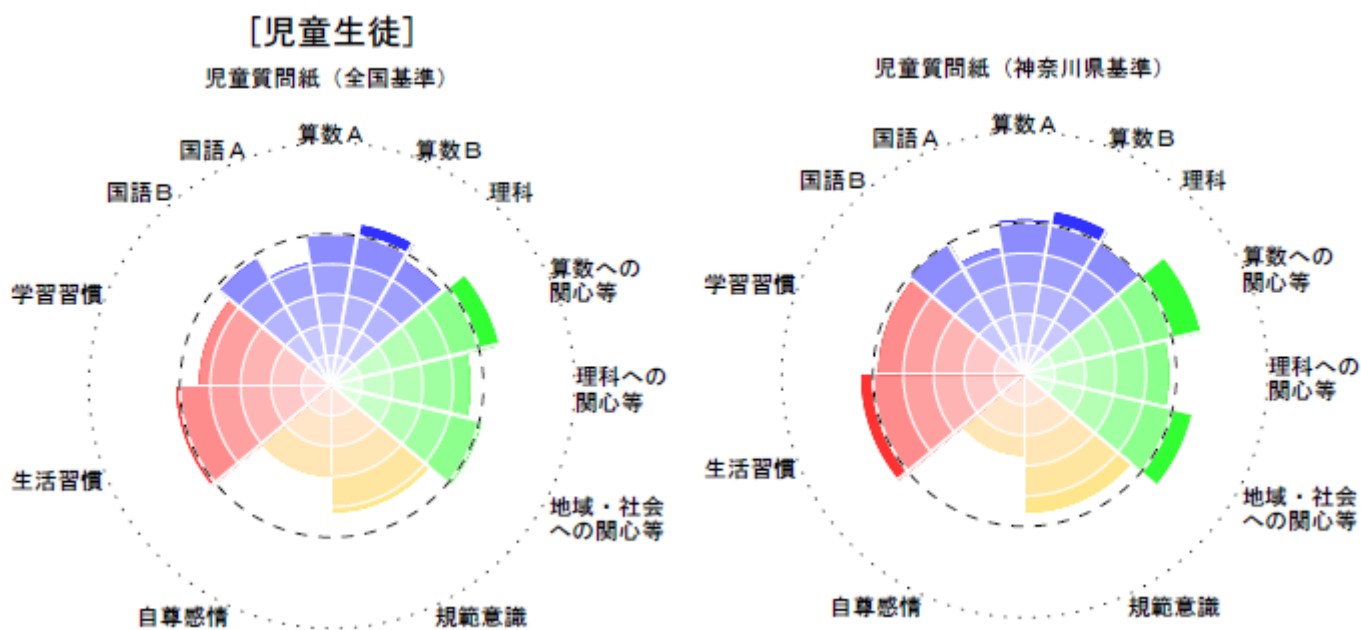


1 チャート及び教科別学習状況調査結果



		国語A (知識)	国語B (活用)	算数A (知識)	算数B (活用)	理科
上川井小	平均正答率	63%	53%	63%	54%	58%
神奈川県	平均正答率	70%	54%	64%	52%	60%
全国	平均正答率	70.7%	54.7%	63.5%	51.5%	60.3%

国語	A (知識)	「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「言語についての知識・理解・技能」の4観点全てにおいて、全国平均を下回っている。特に、既習の漢字を文中で正確に書いて使えること、文章を書く時や読む時に主語と述語を対応させて書いたり読んだりすること、文章の構成について基本を押さえていることの点について、課題があるという結果になった。しかし、適切な敬語を選んで使うことに関しては、全国平均を上回っているもので、できていることは伸ばし、言葉の使い方や文章を書く上での基礎的な力をつける必要がある。
	B (活用)	「話す・聞く能力」「書く能力」が全国平均を下回っているが、「書く能力」に関しては平均に近い結果を残すことができ、「読む能力」については、全国平均を上回っている。何を聞かれている問題なのか読み取り、選択する問題においては、適切な選択肢を選び取る力はある。しかし、選択肢がなく、相手や目的に応じ、内容の中心を明確にしながら、自分で文を書くことに関しては、全国平均に大きく水をあけられている。文を書くことに対する苦手意識を減らせるよう、日常の学習の中で、文を書いたり、要約したりする活動を取り入れ、自分の考えを文章にして表現する力をつける必要がある。
算数	A (知識)	「図形」「数量関係」の二つの領域では全国平均を下回っているものの、「数と計算」「量と測定」の二つの領域では全国平均を上回っている。昨年度まで、算数に力を入れて、授業改善に取り組んできた結果、数直線を使って考える習慣が身につく、1に当たる数をみつけ、問題のなかの数量関係を数直線上に表して理解することができている。また、上小ホームワークで、計算問題を反復練習した成果が出て、計算問題を解く力については、全国平均に比べて高いことが分かった。しかしながら、図形領域の「円」の円周を求めるときの直径の長さや円周率の関係についての理解度や、百分率を求めるときの立式の正確性には課題が残っている。
	B (活用)	「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」の四つの領域全てにおいて、全国平均と同じか、上回る結果を残すことができた。特に、棒グラフや帯グラフに表されていることを読み取る力や、問題の中の数量を表に整理して書き表す力が秀でていた。課題としては、国語の「書く力」と関連してくるが、導き出された答えを、根拠を明確にして記述する力や、示された情報を解釈し、条件に合うように筋道立てて考える力が、まだ全国平均に比べて低いことが挙げられる。自分の考えを説明する活動を多く取り入れて、筋道を立てて思考する習慣を身につけさせたい。
理科		「科学的な思考・表現」「観察・実験の技能」の二観点で全国平均を下回っているが、「自然事象についての知識・理解」に関しては、全国平均を上回っている。くり返し指導された基礎的な内容に関しては、知識としてしっかり定着しており、適切に選択肢を選ぶことができた。一方、理由を明らかにしながら実験方法や結果を説明することに課題が残っている。

国語Aを除いて、国語B、算数A、算数B、理科の平均が、全国平均と遜色ない結果となった。三年前より取り組んでいる「上小ホームワーク」で、基礎基本を反復して練習することで、基礎学力が身につけてきた成果と言える。また、文章題を解く時に数直線を使って思考する習慣を身につけたことで、応用問題においても正確に解ける児童が増えていることが分かった。しかし、文章を書くことに苦手意識をもち、文を書くことを不得手にしている児童が多い実態に変わりがないため、文章の構成メモを作り、起承転結を考えながら文を組み立てる活動を継続し、文を書く際の苦手意識を少なくしていきたいと考えている。今後も、児童の意欲をより高めながら、上小ホームワークや朝学習の時間を利用し、基礎的な力をつけるとともに、応用問題にも取り組み、複雑な問題にも慣れるようにしていきたい。

2 「児童質問紙」回答から見えてくる児童の意識、生活習慣、学習習慣について

	上川井小学校	全国
自分には、よいところがあると思っている児童	54.8%	84%
先生に、自分のよいところを認めてもらっていると思う児童	80.6%	85.3%
将来の夢や目標をもっている児童	74.2%	85.1%
学校のきまりを守っている児童	74.2%	89.5%
人の役に立つ人間になりたいと思っている児童	96.8%	95.2%
朝食を毎日食べている児童	90.3%	94.5%
毎日、同じくらいの時刻に寝ている児童	80.6%	77%
毎日、同じくらいの時刻に起きている児童	93.5%	88.8%
家で、自分で計画を立てて勉強をしている児童	58.1%	67.6%
家で、学校の宿題をしている児童	100%	97.1%
平日に2時間以上家庭学習をしている児童	12.9%	29.3%
1日あたり、1時間以上読書をしている児童	22.6%	19.3%
家の人に学校での出来事を話している児童	80.6%	80.5%
地域社会などでボランティア活動に参加したことがある児童	64.5%	62.6%

児童の回答から、本校の6年生児童は、「自分にはよいところがある」と思っている児童が少なく、自尊感情が低いことが分かった。また、「学校のきまりを守っている」と回答している児童も少ないことから、規範意識の低さがうかがえる。ルールを守らないことで、注意される場面が増え、それが「先生によいところを認めてもらっていない」「自分にはよいところがない」との意識につながっていることが一つの要因であると考えられる。しかし、4月当初に比べ、6年生は、様々な行事を学校の代表として牽引していく中で、責任感が生まれ、「頼れる6年生」と成長している実態もある。最高学年として認められる中で、自尊感情も徐々に高くなっていると考えられる。今後も、学校全体で、一人ひとりの子どもを認め、褒め、自尊意識を高めていきたいと考えている。

家庭学習の面では、「上小ホームワーク」が浸透し、宿題をする習慣が身につけていることが分かる。しかし、「決まっていること」は行いうが、計画を立てて自ら学習を行う意識の高まりにまでは至っていないことがうかがえる。授業の中でも、「もっとこのことを知りたい、調べたい」と思えるような工夫をしていく必要がある。

また、本校の特色として、地域やお家の方との関係性が密であることが、地域行事の参加率やボランティア参加率でも現れる結果となった。今後とも、地域・家庭との連携を大切にし、子ども達の育成に努めていきたい。